

＜書 評＞

大阪大学講師 飯 田 喜 俊 著

診療における水と電解質

聖路加病院内科医長 日野原 重 明

第二次世界大戦の終わった数年後に、教育ミッションのグループの一人として Darron 博士が来日した頃は、我が国では電解質に関する知識が臨床にまだとり入れられていなかった。この方面ではアメリカの医学と日本の医学の隔たりは非常に目立っていた。

その後、この方面の知識を臨床にいかすための努力が諸家によりなされてきたが、その後、約25年たったにもかかわらず、未だこの方面の医学になじまない臨床医が少なくない。

その理由は mg% を mEq/L という尺度にかえて表現する方法になじみにくいことや、電解質の測定がすぐにやれる laboratory が少なかつたためである。

ところが今日では、多くの病院や、いろいろの検査センターで簡単にこ

れらの測定が行なわれるようになったので、今後、この方面の医学は急速に臨床医の間に普及すると思う。

さて電解質の本となると、これを専門にとりくむもの以外には、何となくとっつきが悪いのは、内容を理解させるための理論的な説明は多いが、実際の治療法の説明が不足していたためである。

今回、医学書院から出版されたこの飯田喜俊博士の「診療における水と電解質」は、この方面の知識に弱い一般臨床家のために理解されやすいスタイルで、非常にわかりやすく輸液のやり方や諸疾患時の電解質異常に対する処置が書かれている。

飯田博士は、私がかつて学んだ米国ジョージア州アトランタ市の Grady Memorial Hospital でこの方面の研修をうけられたが、帰国後、淀川キリスト教病院でこの方面の臨床

経験を重ね、内外の文献とその経験とから 240 頁の本書を最近書き上げられた。

本書の特色は、全体の 4/5 が色々の疾患時（腎不全、間脳下垂体系疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、糖尿病、心疾患、高血圧症、呼吸器疾患、胃・肝疾患、骨・筋疾患、中枢神経系疾患）における水と電解質の失調と、これに対する処置が具体的にかけられている。

本書の特色は、治療法が具体的であり、疾患別であるということである。最後には、老年者の電解質異常と輸液の仕方が述べられている。

本書は各科の実地臨床医にとって電解質のよい解説書であると共に、日常臨床の治療の手びきとして大いに役立つものと思う。

B5判 頁262 図74 写真2 円2,600
円120